

いく子の町

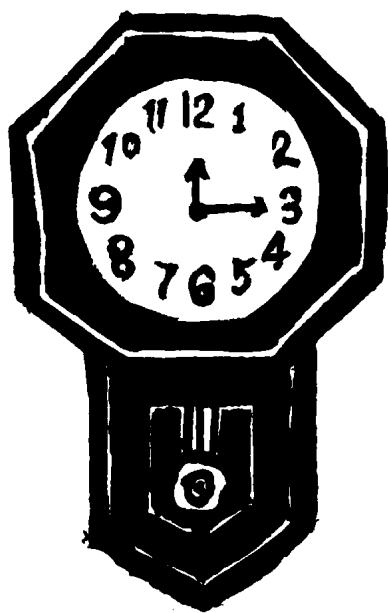
筒井 頼子 作
織茂 恭子 画



町の子

筒井 頼子 作

織茂 恭子 画



福音館書店



いく子の町

一九九〇年三月二日 初版発行

著者 筒井頼子

発行 福音館書店

郵便番号 一一三

東京都文京区本駒込六―六一三

電話 営業部 (〇三) 九四二―一二三六

編集部 (〇三) 九四二―二〇八一

振替 東京五―一一七六四五

三美印刷

製本 黒岩大光堂

● 落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

● NDC 九一三／三二〇ページ／二一×一六センチ

© 1990 Yoriko Tsutsui / Printed in Japan

ISBN 4-8340-1028-7

7 6 5 4 3 2 1

決心……………165
 兄さんのけが……………155
 仲間はずれ……………146
 月見会……………134
 福さん……………124
 母さんの病気……………110
 闇……………101

秋

4 3 2 1

メ	た	林	町
り	つ	の	へ
ー	や	家	………
66	48	18	3

夏



5	4	3	2	1		6	5	4	3	2	1
贈り物	別れ	自転車さがし	映画館	こぎくらべ	春	退院	りんご売り	ボーイフレンド	母さんのいない家	電報	岸内さん
.....											
301	292	278	267	259		246	230	216	202	192	181

冬



夏



1 町へ

ガラス窓に、ぼんやりといく子の顔がうつっている。

窓のむこうは、暗い闇——その闇の中を、夜行列車は走りつづけている。

あすの朝、到着するこの列車の終点まぢかに、いく子の行く町がある。その町で新しい暮らしが始まるのだ。

いく子はけさまで、北の国の小さな村に住んでいた。まわりを山で囲まれ、町までおりていくバスが、一日二回しか通わない小さな村だった。そこに母さんと、中学一年になる兄さんのひさしと、一年生になったばかりの妹のかつ子と、四人で暮らしていた。父さんは電話の技師で、全国をわたり歩いて仕事をしていたから、村の家に帰ってくるのは、年に数えるほどだった。

——いつか東京に家を建てて、みんなでいっしょに暮らせるようにする——

父さんは長い出張から帰ってくるたびに、そう言っていた。そしてその「いつか」が、いく

子が四年生の夏休みにはいった今、とうとうやって来たのだ。

いく子はガラス窓にぐっと顔を近づけ、窓のむこうの闇を見つめた。するとまた、けさ、山の村でバスを待っていた時のことが、目にうかんできた。

見送りに来ていた母さんの知りあいや、兄さんの先生、友だちにまぎって、仲よしのみね子ばかりでなく、かずしまでいたのだ。みね子が来てくれたのはうれしかったが、かずしがいたのは意外だった。

かずしは、しょっちゅう、いく子の髪をひっぱった。それに、いく子がいちばん気にしている悪口、ハゲを、大声でどなったりした。いく子は、はいはいする赤んぼうだった時、頭からいろいろの火に落ちてやけどをし、その跡が、頭の中に小さく残っていた。

かずしを見つけて、いく子とはつさに頭に手をやった。けれどもかずしは、いく子の髪もひっぱらず、悪口も言わなかった。まるで初めて会った時から、ずっとそうだったとでもいうように、ずいぶんやさしい目でいく子を見た。

「お前のごとなば、忘れねえやあ」

みね子と言った。

「俺も……」

いく子は、しっかりとみね子を見た。

「手紙っこ、けれなあ」

「ん……、お前もなあ」

その間かずしはなにも言わず、ただ、つばをはいたり土をけったりしていた。

みね子と話すことは、まだまだたくさんあったはずなのに、ことばは胸の中でもつれあつてかたくなり、むりに話そうとするとぼつぼつ切れた。

もう来ないのかもしれないと思うほど待ったバスが、やっと到着して、いく子が乗りこもうとした時、かずしが初めて口をきった。

「ほれ、ハゲよう、ほれ……」

かつとして、ぶつてやろうとあげたいく子の手に、かずしがいきなりなにかを握らせた。気持ちかがふとゆるんだすきに、かずしはあつかんべをして、走っていつてしまった。

かずしが残していったものは、丸いどっしりしためんこだった。桜の図柄がいちめんに描かれていた。かずしが、危ないといふんだ相手にむかう時だけ使う、とっておきのめんこのはずだった。それはめつぼう強く、むかうところ敵なしかった。

「ほれ、出だ。ほいさ」

いく子は得意とくいそうなかずしの声を、何度も聞いたことがあった。

動きだしたバスの中から、手をふっている人たちの姿すがたが見え、すこしはなれて、かずしが見えた。かずしはだらんと手を下げて、バスのほうを見ていた。そしてその姿すがたは、あっけなく、カーブをまがったバスの窓から見えなくなった。

——こった物もの、何なんして寄よごしたなだべあ——

その時、とりあえずポケットに入れためんこを、いく子はスカートの上からなぞって、ほうと息をついた。

車内の灯あかりは、もうずいぶん前に小さくなっていた。

まわりの人たちは、重そうに頭をたれ、座席ざせきの背せにもたれて眠ねむっていた。となりで妹のかつ子も眠ねむっていた。夜行列車の人たちの、さまざまあしだが、東京で始まる——。

——兄さんも、もう眠ねむったなだべが——

家族が、まとまって席せきをとることができず、兄さんのひさしは、いく子の後ろの席せきにすわっていた。

「眠ねむれ……」



母さんがふつと目をあけて、はすむかいの席から低い声で歌うように声をかけてきた。

いく子は、また、ほうつと息をつき、もう何度も想像をめぐらして、すでに写真で見たもののようにくつきりと思い描ける新しい家のことを考えた。

「それはもう、ほとんど東京といつてもいい場所だ。町中からすこしはなれるが、高台にあつて、まわりは林だし、水はきれいだし、静かだし。それに目と鼻の先に、車の通る大通りがあるし……いい所だ」

父さんはそう言っていた。

水がきれいだというのだから、近くに小川が流れているのだろう。高台というからには石段があるはずだ。その段々をのぼっていくと、白い壁の、小さなお城のような新しい家がある。父さんが、いつか買ってくれた雑誌にのつていたような家――。

父さんがそう言ったわけではなかったが、想像の中の家は、絶対に白い壁の家だった。

「病気になるはあ。眠れ」

母さんはまたちらと目をあけて、ささやいた。

いく子は目をつぶった。

荷物といっしょに先に行っている父さんは、ほんとうに迎えにきてくれるだろうか。いつも

出張ばかりしていた父さんが、今度こそ新しい家でいっしょに暮らせるようになるのだ。

いく子は、汗の中でまどろんだ。

列車をおりた駅に、人はまばらにしかいなかった。空は青く、駅には赤いカンナが咲いていたが、雑誌で見ていた東京の町のにぎわいはどこにもなく、空の青さもカンナの赤さも、どこかぼやけていた。

父さんはすぐにわかった。

「まず、無事でなによりだった」

父さんは母さんの荷物を半分、受け取って言った。

「どうだ、かつぼ、初めて乗った列車は。おもしろがったべ？　いく子はどうだ。眠れだが？」

「何もかえも、ほんとと飛んで行ってしまふなよ、景色が。ほんと、ほんと。もう百回も、目、回った氣いしたつけ」

かつ子は、声をはりあげた。

「そうか。百回もか。そらあ、すごい。いく子はどうだ、眠れだがや？」

「うん。だのも、体じゅう、痛えなあ」

いく子は、まわりの人たちに聞こえないように、小さい声で言った。村のことばを町の人たちに聞かれるのが、はずかしいような気がして、村にいることの少なかつた父さんのことばが、すこしうらやましかった。

「町中^{まちなか}からすこし、はなれるが、高台にあつて、まわりは林だし、水はきれいだし、静^{しず}かだし、それに、目と鼻の先が大通りだし、いい所だ」

駅前の大通りにむかいながら、父さんは、もう何回も聞いたことばをくりかえした。けれどもいく子は、通りの店に目をうばわれていた。

果物^{くだもの}ばかりを並^{なら}べている店があるかと思えば、お菓子^{かし}ばかりを並^{なら}べている店もあつた。

服だけつるしている店や、本だけおいてある店もあつた。しかも、同じものを売っている店が、何軒^{なんげん}もあるのだ。ぴかぴか光る自転車^{じてんしゃ}が、ガラス越^ごしにずらつと見える自転車屋、車が何台かおいてあるモータース。そして、看板^{かんばん}、街灯^{がちょう}――。

村には店は、たつた一軒^{いっけん}だけだつた。村の店にはなんでもあつて、どんな用事も、たいいていそこですんでしまふのだつた。

通りを行く人たちの服装^{ふくそう}も、村とはまるでちがつていた。女の人たちは、かすりのモンペではなく、たいいていスカートをはき、ブラウスを着ていた。明るい色があふれていた。

とつぜん、鋭い警笛すどけいてきが鳴って、いく子とはびあがった。

「右！ もっと右に寄よって！」

父さんがさげんだ。

すぐわきを、乗用車が通りすぎた。いく子はばかんとして、遠くなっていく乗用車をながめた。そのあとを、トラックが走っていった。

村の大通りを、土ぼこりをあげて通りすぎるのは、バスとトラックだけだった。バスは、朝と夕、一回ずつで、トラックなどは、何日も見るのがなかった。トラックだ——という声があがると、いく子たちは、なにをしても、大通りに走りだしていった。大通りに着くころ、トラックはもうたいい通りすぎて、小さくなっていたが、それでも、見えなくなるまでその影かげを見送ると、だれかれなくほうつと息をついて、しばらくは遊びにもどらなかった——。

また一台、トラックが、後ろからいく子を追いぬいていった。また一台——。

町に來たのだ。

「さあ、右側みぎがわにわたって」

大通りに出た時、父さんが言った。

父さんは先頭に立って、右手を高くあげ、大通りをわたった。その後ろを、母さんとかつ子

がいっしょにわたり、いく子は兄さんと、胸をどきどきさせながらわたった。

かつ子は、父さんと並んで歩きたがったが、父さんは、一列に、並んで歩くように注意した。そうしないと、車にひかれてしまうのだ。町の道を歩くことは、なんて恐ろしいことなのだろう。爪の先にまで力がある。

父さんは、バスの停留所で立ちどまった。そして時刻表を見、時計を見た。

「行ってしまったばかりだなあ」

父さんはつぶやいた。

「次のバスまで、あと一時間ある」

「だいぶ、歩ぐんすごど？」

母さんが聞いた。

「子どもの足でも、歩けないことはないのも……」

「歩ご」

兄さんが言った。

「歩ご」

いく子も賛成した。早く、新しい家が見たかった。